

## 「聖書の中の癒しの音楽」(その1)

—旧約・新約聖書にかかれた様々な音の世界と癒しの力—

鎌田 滋子

### Music Therapy in Holy Bible

Shigeko KAMADA

In many holy stories in the Old Testament and also the New Testament, there are a great deal of episodes of music. These episodes are not only historically interesting but also tell us the fact that music has some power of treatment for psychological symptoms, which gives us hints for music therapy and therapists. European music has been developed by Christianity, and Christianity raised music to Art. Suported by the Arts, music has power for human spirit.

#### 1. はじめに

西洋音楽を語る時、その歴史、その論理そして音楽そのものとキリスト教との関係は、計り知れないほど密接である。キリスト教が存在しなかったら、また現在まで累々と続かなかつたら、音楽そのものが存在しなかったと言える。長大かつ膨大なキリスト教の歴史をここで述べることは不可能であるが、キリスト教と、イエス・キリストの歴史を書き綴った聖書のなかから、現在の音楽への歴史と言え記述が読みとれる。またこれらの音楽の記述がほとんど、音楽そのものの持つ、人々への癒しの力を期待しかつその効果を記述していることに、筆者は、現在もっとも注目されている音楽の持つ心身の癒しの力「音楽療法」との接点と多くの具体的な事例を読み取ることができる。

現在にいたるまで、多くの作曲家は、聖書の中の様々な劇物語や、その儀式の中で伝えられる言葉や、詩篇に代表されるすぐれた詩の数々を、各自の個性と美学で音楽として表現し伝えてきた。それは、「天地創造」、「サムソンとデリラ」、「サロメ」等の劇場作品となり、カトリック教会のもっとも重要な典礼である「ミサ」として「レクイエム」「テ・デウム」を作曲し、

また、プロテスタントの作曲家、バッハは、数々の「受難曲」「ミサ曲」等を誕生させ宗教音楽作品となった。これらの、いわば、宗教的儀式の音楽様式は必ずしも聖書の記述のとおりではない。様々な音楽の変遷を経て、現在の様式となっている。この様式については、後に述べたい。

もともと音楽の起源は、呪術や宗教と大いに深い関係にあり、世界中に、音が「世界創造」の役割を演じた伝説や、自然現象の音を呪術的に説明し、利用して人間をとりまく様々な困難の解決に使われた歴史もある。もともと音に内容と表現を与え、それを組織化したものが「音楽」とするなら、その神秘性が宗教に取り入れられたことは、自然な成り行きと言える。

音あるいは音楽は、手に触れ、目に見えるものではない。そのことが、音あるいは音楽が、超自然的な世界とのコミュニケーションとして利用され、ひいては宗教との深い関わりをもつようになり、先に述べた、呪術的な使われ方(病氣治療、痛みの除去等)としての事実も存在する。

このような歴史事実から、音あるいは音楽が現在の「音楽療法」への流れになっていったのは、全く自然な成り行きといえるだろう。

## 2. 旧約聖書のなかの音楽

## ①「出エジプト記」

旧約聖書のなかに初めて「音楽」が登場するのは、「出エジプト記」第15章である。それ以前の「創世記」（天地創造、エデンの園、ノアの方舟等）には、はっきりとした「音楽」の記述はない。

「出エジプト記」はBC1580～1080ごろまでのエジプト新王国時代のラムセスⅡ世（在位BC1290ころ～BC1224ころ）の年代、エジプトに渡って奴隷状態に貶められていたイスラエルの人々が、指導者モーゼにより、集団でエジプトを去り、カナン之地に赴いた記述をした「章」である。モーゼは、その長い苦難の旅の途中神より授かったちからにより、エジプトからカナンの間をへだてていた海を陸地として、イスラエルの人々を導いた。その奇跡のあとに、こうある。

## 「出エジプト記」第15章

そこでモーゼとイスラエルの人々は、この「歌」を主にむかって歌った。彼らは歌って言った、

「主にむかってわたしは歌おう、  
彼は輝かしくも勝ちを得られた、  
彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。  
主はわたしたちの力また歌、わたしの救となられた  
彼こそわたしの神、わたしは彼をたたえる、  
彼はわたしの父の神、わたしは 彼をあがめる。

}

}

バロの馬が、その戦車および騎兵と共に海にはいると、主は海の水を彼らの上に流れ返らされたが、イスラエルの人々は海の中からかわいた地を行った。そのとき、アロンの姉、女預言者ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちも皆タンバリンを取って、踊りながら、そのあとに従って出てきた。そこでミリアムは彼らに和して歌った、

「主にむかって歌え、  
彼は輝かしくも勝ちを得られた、  
彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。」

女預言者ミリアムは「シャーマニズム」の「巫女」の一人と言えよう。その後第19章にはこうある、

## 「出エジプト記」第19章

三日目の朝となって、かみなりと、いなずまと厚い雲

とが、山の上にあり、ラッパの音が、はなはだ高く響いたので、宿営における民はみな震えた。モーゼが民を神に会わせるために、宿営から導き出したので、彼らは山のふもとに立った。シナイ山は全山煙った。主が火のなかであって、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山はげしく震えた。

ラッパの音が、いよいよ高くなったとき、モーゼは語り、神は、かみなりをもって、彼に答えられた。主はシナイ山の頂に下られた。そして主がモーゼを山の頂に召されたので、モーゼは登った。

}

}

この記述のように、超自然的な音とともに神がモーゼのまえに現れ、このシナイ山で彼は「十戒」を神より授かり、これがイスラエルの律法の元となった。この後、モーゼの物語は続き、「民数記」第10章に以下の記述がある。

## 「民数記」第10章

主はモーゼに言われた、「銀のラッパを二本つくりなさい。すなわち、打ち物造りとして、それで会衆を呼び集め、また宿営を進ませなさい。この二つを吹くときは、全会衆が会見の幕屋の入口に、あなたの所に集まってこなければならぬ。もしその一つだけを吹くときは、イスラエルの氏族の長であるつかさたちが、あなたの所に集まってこなければならぬ。またあなたがたが警報を吹き鳴らす時は、東の方の宿営が、道に進まなければならない。二度目の警報を吹き鳴らす時は、南の方の宿営が、道に進まなければならない。また会衆を集める時にも、ラッパを吹き鳴らすか、警報を吹き鳴らしてはならない。アロンの子である祭司たちが、ラッパを吹かなければならぬ。これはあなたがたが、代々ながく守るべき定めとしなければならない。また、あなたがたの国で、あなたがたをしいたげる戦いに出る時は、ラッパをもって、警報を吹き鳴らさなければならない。そうするならば、あなたがたは、あなたがたの神、主に覚えられて、あなたがたの敵から救われるであろう。また、あなたがたの喜びの日、あなたがたの祝いの時、および、月々の第一日には、あなたがたの燔祭と酬恩祭の犠牲をささげるに当たって、ラッパを吹き鳴らさなければならない。そうするならば、あなたがたの神は、それによって、

あなたがたを覚えらるであろう。わたしはあなたがたの神、主である」

この記述から、すでにこの時代から、民衆の心を一つに集め、ある目的のためにたばねるために、音楽が用いられていたことがわかる。これは、後世、世界中で行われた「戦争」にも関わりを持つ。

音楽が、「神から出て神にもどる贈り物」であり、人間の幸福と健康のために貢献する贈り物であると考えられる場合でも他の「神よりの贈り物」と同様に、音楽が「悪魔の道具」となった歴史も否定出来ない。「戦争」ばかり、また、この「出エジプト記」にみられるように、民衆をある種の催眠状態におき、ヒステリー症状を引き起こし、ある時は民衆を危険な道へと引きずり込む力も持っていたといえるであろう。第二次世界大戦時、ドイツナチスは、ワーグナー(1813-1883)のオペラをドイツ民の優性を鼓舞する道具として使った。民衆は何の疑いもなくワーグナーの魔術的な音楽の虜となり、ユダヤ人大量虐殺などの悲劇を生んだのである。このような音楽の使われ方があった事を忘れてはならない。

## ②「サムエル記」

モーゼの死後、イスラエルの人々は、約束の地カナンへ入った。この記述は、「ヨシュア記」「士師記」「サムエル記」にある。歴史的には、BC1225~1050ころの時代とみられる。この中に、「サムソンとデリラ」の物語がある。この中に、デリラがサムソンを誘惑する言葉に「あなたの声によって私の心は溶け、開かれる」とある。人間の声、歌、言葉により、同じ人間は癒されるのである。

この後に続く、旧約聖書のハイライトとも言える記述は、「ダビデ」の物語である。そしてこれこそが、「音楽の癒し」を具体的に記述した、最も古い記録と言ってもよいであろう。この記述は現代の「音楽療法の祖」とされるイギリス人の音楽療法研究家、ジュリエット・アルバン女史の著書に取り上げられている。そして、多くの神学学者、音楽歴史学者によってもこの「ダビデ」という英雄の音楽の才能と音楽が民衆に与えた影響についての研究がされている。

イスラエルの宗教的指導者である「士師」の最後の人物とされる、サムエルによって王となるべき運命を告げられた「サウル」は、予言どおり、イスラエルの統一を目指し、王の位につく。「サムエル記」に以下

に記述がある。

## サムエル記上 第16章

さて主はサウルを離れ、主から来る悪霊が彼を悩ました。サウルの家来たちは彼に言った、「ごらんない。神から来る悪霊があなたを悩ましているのです。

どうぞ、われわれの主君が、あなたの前に仕えて家来たちに命じて、じょうずに琴をひく者ひとりを探させてください。神から来る悪霊があなたに臨む時、彼の手で琴をひくならば、あなたは良くなられるでしょう」。

そこでサウルは家来たちに言った。「じょうずに琴をひく者を捜して、わたしのもとに連れて来なさい」。その時、ひとりの若者がこたえた、「わたしはベツレヘムびとエッサイの子を見ましたが、琴がじょうずに、勇気もあり、いくさびとで、弁舌にひいで、姿が美しい人です。また主が彼と共におられます」。そこでサウルはエッサイのもとに使者をつかわして言った、「羊を飼っているあなたの子ダビデをわたしのもとによこしなさい」。

エッサイは、ろばにパンを負わせ、革袋にいれたぶどう酒一袋と、やぎの子とを取って、その子ダビデの手によってサウルに送った。ダビデはサウルのもとにきて、彼に仕えた。サウルはひじょうにこれを愛して、その武器を執る者とした。またサウルは人をつかわしてエッサイに言った、「ダビデをわたしに伝えさせてください。彼はわたしの心にかないました」。神から出る悪霊が、サウルに臨む時、ダビデは琴をとり、手でそれを弾くと、サウルは気持ちが鎮まり、良くなって悪霊は彼を離れた。

この記述のなかの「神から出る悪霊」は、現代での「躁鬱病」、「ノイローゼ」あるいは、「精神疾患」と考えられる。驚くことにこの「神から出る悪霊」という考え方は、19世紀末まで、心理学や、精神医療の場でも依然として存在していた。これらの精神疾患が科学的に証明されたのは、ここ1970年代からと言っても過言ではない。

「神から出る悪霊」をダビデの琴によって追い払ったというこの記述は、音楽の癒しの力とその事実を物語る。そしてこのダビデ自身も音楽によって癒されている。以下の記述がそれをものがたる。

サムエル記上 第18章

人々が引き揚げてきた時、すなわちダビデが、かのペリシテびとを殺して帰った時、女たちはイスラエルの町々から出てきて、手鼓と祝歌と三糸の琴をもって、歌いつつ舞いつつ、サウル王を迎えた。女たちは踊りながら互いに歌いかわした、

「サウル王は千を撃ち殺し、  
ダビデは万を撃ち殺した」。

この後、サウルは再び、ダビデへの嫉妬と恐怖心から「主から来る悪霊」により、激しく狂いわめくが、そのたびにダビデは琴により鎮めようとする。サウルは、幾度となく、ダビデを殺そうとするが、「琴を弾く美少年」、「勇敢な戦士」、「繊細な詩人」、「女性好きな王」そして「星のように輝く」ダビデは多くの人々の支持を得て、サウルの死後イスラエルの王となる。

③ 詩編

ダビデの残した大いなる遺産に「詩編」がある。彼はサウルのうつ病を治したほどの琴の名手であったように優れた詩人でもあった。かつては、「詩編」に納められた150の詩すべてがダビデの作とみられていたが、現在はそのごく一部とされる。他は、長年様々な人々によって歌い出された詩とされている。いずれにしても、「詩編」にうたわれた詩は、高揚した感情が声になり、それが人間によって、詩と音楽となり芸術となったのである。そして、「詩編」ほど、音楽の世界で、作曲すること、演奏することそして鑑賞すること、この音楽の持つ大きな3つの力を発揮した詩はないであろう。

詩編 第6編

聖歌隊の指揮者によって楽器にあわせ琴をもってうたわせたダビデの詩。

主よ、あなたの怒りをもって、わたしを責めず、  
あなたの激しい怒りをもって、  
わたしを懲らしめないでください。  
わたしは弱り衰えています。  
主よ、わたしをいやしてください。  
わたしの骨は悩み苦しんでいます。  
わたしの魂もまたいたく悩み苦しんでいます。  
主よ、あなたはいつまでお怒りになるのですか。

主よ、かえりみて、わたしの命をお救いください。  
あなたのいつくしみにより、わたしをお助けください  
死においては、あなたを覚えるものはなく、  
陰府においては、だれがあなたを  
ほめたたえることができましょうか。  
わたしは嘆きによって疲れ、夜ごとに涙をもって。  
わたしふしどをただよわせ、  
わたしのしとねをぬらした。  
わたしの目は憂いによって衰え、  
もろもろのあだのゆえに弱くなった。  
すべて悪を行う者よ、わたしを離れ去れ。  
主はわたしの泣く声を聞かれた。  
主はわたしの願いを聞かれた。  
主はわたしの祈りをうけられた。  
わたしの敵は恥じて、いたく悩み苦しみ、  
彼らは退いて、たちどころに恥をうけるであろう。  
もっとも知られているダビデの詩は、以下である。

詩編 第23編

主はわたしの羊飼いであって、  
わたしには乏しいことがない。  
主はわたしを緑の牧場に伏させ、  
いこいのみぎわに伴われる。  
主はわたしの魂を生き返らせ、  
み名のためにわたしを正しい道に導かれる。  
たといわたしは死の陰の谷を歩むとも  
わざわざを恐れません。  
あなたがわたしと共におられるからです。  
あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。  
あなたんはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け  
わたしのこうべに油を注がれる。  
わたしの杯はあふれます。  
わたしの生きているかぎりは  
必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。  
わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。

詩編 第149編

ハレルヤ。新しい歌を主に向かって歌え。  
主の慈しみに生きる人の集いで賛美の歌を歌え。  
イスラエルはその造り主によって喜び躍れ。  
踊りをささげて御名を賛美し、  
太鼓や堅琴を奏でてほめ歌をうたえ。  
主はご自分の民を喜び、

貧しい人を救いの輝きで装われる。  
主の慈しみに生きき人は栄光に輝き、喜び勇み、  
伏していても喜びの声をあげる。  
ハレルヤ。

(ハレルヤ ギリシャ語 神をほめたたえよ)  
(ハレルヤは、詩編第146編より登場する。)

「詩編」の中の詩の主題は、多岐にわたっている。多くは、神への賛美であるが、賛美することの喜び、神への信頼を表現している。そして、それを朗唱し、あるいは様々な作曲家の手になる「詩編」の名曲を歌い、演奏することで、深い安らぎと癒しを得ることができる。

また「詩編」は、紀元380年頃イタリアミラノの司教アンブロシウスがユダヤやギリシャの音楽や聖歌を取り入れた時、すでにその詩が取り入れられた記録が残っている。(「詩編」第45編)その後紀元600年頃、教皇グレゴリウスⅠ世により、ローマカトリック教会の聖歌の統一促進と組織化されたとき、今日まで伝わる、「グレゴリオ聖歌」として、多く取り上げられている。そして、今日では、固定化された、様々なミサで歌われる固有文の聖歌ともなった。グレゴリオ聖歌による「詩編」の歌い方には定式がある。その目立った特徴は、一定の高さで詩句が語られるように歌われることで、そうした朗唱は古代ユダヤの詩編朗唱の伝統に即したものである。また、早くから詩編の詩句の前後に交唱(問いと答のかたち)的詩編唱の形が行われていた。詩編の詩句の終わりには、栄唱(Gloria patri...)が朗唱され、また「詩編」の終わりをしめくくる「アレヤ」唱は、かなり古くから節をつけて歌われた記録があり、その「神をほめたたえよ」を込めたごく短いこの語句の魅力ともなっている。これらの「詩編」を含む多くの聖歌は、それを、歌うものまた聞くものたちの、心のよりどころとなり現代での「セラピー」の役目を果たしていたとも言える。「ハレルヤ」でもっとも有名なヘンデル(1685-1759)作曲の「救世主」(メサイヤ)／「ハレルヤ」は、ヨハネの黙示録(新約聖書 最終章)によるものである。ただこの黙示録も含め、新約聖書の多くの詩句が、旧約聖書を数多く引用していることから、この「ハレルヤ」唱も、旧約聖書の「詩編」の影響を受けていると言える。この「救世主」(メサイヤ)が初演されたのは、1742年ダブリ

ンでヘンデル自身の指揮によるもので、その後1743年ロンドンでの公演となり、いずれも、「慈善音楽会」として公演され、その後毎年一回はヘンデルの指揮により「慈善音楽会」が34回行われた記録が残っていることも興味深い。このような歴史的な史実もあり、欧米においては、音楽が、単なる楽しみごとではなく、人々の物心両方の救済を目的とし、現在まで受け継がれている。これは、もちろんキリスト教と言う強力な宗教の力は否定できない。しかし、キリスト教に育まれた音楽の力は、民族、宗教を越えた力を持ち、音楽の持つ「癒しの力」を認めないわけにはいかない。

#### ④ ソロモン列王紀

ダビデの時代が終わり、その子ソロモンがイスラエルの王となり(DC961頃とされている)、旧約聖書ではその物語が続く。ソロモンの物語のなかで、後世絵画や交響詩等の芸術作品に扱われ、多くの芸術家はその創造力をそられたのが、ソロモンとシバ(南西アラビアの古代の名称といわれる)の女王の記述であろう。ただこの記述はごく簡単にされているにすぎない。

#### 列王紀上第10章

シバの女王は主の名にかかわるソロモンの名声を聞いたので、難問をもってソロモンを試みようとして訪ねてきた。彼女は多くの従者を連れ、香料と、たくさんの金と宝石とをらくだに負わせてエルサレムにきた。彼女はソロモンのもとにきて、その心にあることをことごとく彼に告げたが、ソロモンはそのすべての問いに答えた。王が知らないで彼女に説明のできないことは一つもなかった。シバの女王はソロモンのもろもろの知恵とソロモンが建てた宮殿、その食卓の食物と、列座の家来たちと、その侍臣たちの施侯ぶり、彼らの服装と、彼の給仕たち、および彼が主の宮でささげる燔祭を見て、全く気を奪われてしまった。

彼女は王に言った。「わたしが国であなたの事と、あなたの知恵について聞いたことは真実でありました。しかしわたしがきて、目に見るまでは、その言葉を信じませんでした。今見るとその半分もわたしは知れされていなかったのです。あなたの知恵と反映はわたしが聞いたうわさにまさっています。……」

}

そして彼女は金二十タラントおよび多くの香料と宝石とを王に贈った。シバの女王がソロモン王に贈ったよ

うな多くの香料は再び来なかった。

}

ソロモン王はその豊かなのにしたがってシバの女王に贈り物をしたほかに、彼女の望みに任せて、すべてその求めるものを贈った。そして彼女はその家来たちと共に自分の国に帰っていった。

この後第11章に、「ソロモン王は多くの外国の女を愛した。…」と言う記述がみられることから、このアラビアの女王（一説では現在のエチオピアともいわれている）の容姿、声、教養に、ソロモン王が魅了されたに違いない。後世、ローマの指導者の、ジュリアス・シーザーがエジプトの女王クレオパトラに魅了されたのと同じように。

### ⑤ 愛の歌「雅歌」

先に取り上げた「詩編」に続いて、旧約聖書では、「雅歌」が記載されている。これはすべて恋愛歌集で、神についての言及は一言もない。その異色の詩がどうして旧約聖書に載せられたのか様々な説があるが、教会側が「神と人との愛の交歓を歌った詩」としているのに対し、このように美しく自然な愛の詩集を、聖書という不滅の書に保存したいという、多くの人間の願望の表れと言う説と分かれている。

そのなかの「ソロモンの雅歌」

#### 雅歌 第一章

どうか、あなたの口づけをもって。

わたしに口づけをしてください。

あなたの愛はぶどう酒にまさり、

あなたのおい油は芳しく、

あなたの名は注がれたにおい油のようです。

それゆえおとめたちは、あなたを愛するのです。

あなたのことについて、行かせてください。

わたしたちは急いでまいりましょう。

王はわたしをそのへやに連れて行かれた。

わたしたちは、あなたによって喜び楽しみ、

ぶどう酒にまさって、あなたの愛をほめたたえます。

おとめたちは真心をもってあなたを愛します。

}

この「ソロモンの雅歌」の意味は「ソロモン風の詩」という意味で、ソロモン王自身が作ったというわけではない。ただ、ダビデの子であるソロモンの文才や格

言は先の「列王紀」にも数多く紹介されている。したかって、ソロモン王の感性に影響を受けたおおくの詩が歌われていることも事実である。

「雅歌」には若者と乙女の交換の詩も多くみられる。

若者 恋人よ、あなたは美しい。

あなたは美しく、目は鳩のようだ。

乙女 恋しい人、美しいのはあなた、

わたしたちの寝床は緑の茂み。

レバノン杉が家の梁、糸杉が垂木。

若者たちの愛の交歓には、自然のなかの動物、植物が多く表れる。性愛を否定的にみる考え方は旧約聖書の時代にはなかった。したかって、愛の出会い、喪失も「閉ざされた園」「園の泉は命の水を汲むところ」とエデンの園を讃えている。

ユダヤ系フランス人の作曲家、タリウス・ミヨール(1892~1971)は1937年両親の金婚式を祝ってこの「雅歌」から歌詞を選び歌曲を作曲した。

「歌のなかの歌」「Cantique des Cantiques」とよばれる。

旧約聖書はこのあと、イザヤ書、エレミア哀歌。ダニエル書、等と続き、マラキ書で終結する。これらは、ヘレニズム文化や、ローマ時代の出来事や預言者の言動が綴られて歴史書の感さえある。これらは、前編、中編と比べ、ドキュメントの記述が多く、詩や音楽の記述は影をひそめる。

### 3. 旧約聖書の音楽のメッセージ

以上、旧約聖書の記述を順番に追って、その中で聞こえてくる音楽について、のべた。そもそも旧約聖書はユダヤ教の聖書とされているが、キリスト教の場合新約聖書に先立つ聖典として認められている。「約」は「契約」を意味するもので、神による古い契約の書が旧約聖書、新しい契約の書が新約聖書である。

旧約聖書では、神の約束として、救世主が顕れるとされ、イエス・キリストがこの世に降誕し、それによって旧約聖書でなされた、神との契約は果たされたと言われている。

一方、ユダヤ教に伝わる様々な音楽は、口伝により世界中に多く存在している。これらは、古楽器演奏者の多くによって発掘され、国際古楽音楽祭等で歌われ、

演奏されている。興味あることは、その歌詞は、特定されていないことである。ヘブライ語をはじめとし、フランス語、ロシア語様々である。推測を出ないが、旧約聖書のなかで歌われた逸話も、現存しているユダヤの歌、音楽と近いものもあるといわれているが、それを証明する手段はない。その詩は、あきらかに「詩編」や「雅歌」と一致するものもある。旧約聖書の音・音楽は、想像するより方法はない。しかし、この中に記述された事項を理解し、伝承するために、多くの音・音楽が用いられそれが今日の音楽を芸術にまで高めた原動力となったのは事実である。今日西洋音楽の元となる、「和声学」「対位法」も、キリスト教伝承の中から生まれた。あのドームに象徴される教会建築がなければ、「倍音」を基準とした、和声は誕生しなかった。また、グレゴリオ聖歌に代表される、聖書の文句を人々に教え、また教会の典礼に音を取り入れる知恵がなかったら、「対位法」は発達しなかった。

先に述べたように、現在の西洋音楽は、民族、宗教を越えたところに位置する。音楽を芸術に高めた多くの人間の英知は、その元として存在する「聖書」があったこと、その中の人間の高い精神性の追求があつてこそ成立した。聖書に書かれた多くの音の世界は、なんらかの人間の精神の安らぎ、癒し、高い倫理性を望んでいる。このことが、後世、多くの作曲家、演奏家そして聞き手を高い精神性に導いたことになる。それが、聖書の音楽の最大のそして最重要のメッセージと言えるのである。

## 参考文献

- アルヴァン, J. (著) 櫻林 仁・貫 行子 (訳) 1969 音楽之友社  
ヴァーグナー, G (著) 岩淵達治・狩野智洋 (訳) 1998 ヴァーグナー家の黄昏 平凡社  
木崎さと子 2000 聖書物語 講談社  
共同訳聖書実行委員会・日本聖書協会 (訳) 1999 聖書 日本聖書協会  
美山良夫・茂木 博 (編著) 1981 音楽史の名曲 春秋社  
音楽芸術 1998年11月号 「特集 レクイエムを読む」 音楽之友社